

充分ではなかったと聞かされました。

弟も昭和二十年には内地部隊に入りましたが、すぐ終戦になり無事帰っており、家族全員が揃うことができて何より幸いでした。

## 迫撃砲第四中隊

### 沖縄戦に散華す

千葉県 石田 淑 孝

私は、昭和十九年九月十日、群馬県利根郡沼田町を原隊とする「東部第四十一部隊」で編成された独立迫撃砲第四中隊第二小隊の第六分隊長として、原隊の沼田を出発した。九月二十五日門司港で「万生丸」に乗船、十数船の船団の左側二番船として出帆した。初めてみる船団の威容は堂々たるもので、「ああ堂々の輸送船」の軍歌を想い出された。

出航二日目の明け方、船上がにわかに騒がしくなった。「左舷側方航跡発見」監視兵の怒号である。恐れ

ていた敵潜水艦の魚雷攻撃である。左舷方向から、長さ三・四メートルの魚雷が白い泡状の航跡を引いて「万生丸」に向かって突進して来るではないか、運を天に任せて、ひたすら息詰まる思いで魚雷を睨むよりはか処置はなかった。幸運なるかな魚雷は「万生丸」の直前を横切った。「助かった!」と思った瞬間、この魚雷は右舷を進んでいた輸送船の後部に命中、鈍い爆発音と共に十数メートルの水柱を上げて轟沈である。続いて我が船の右舷後方を進航していた輸送船も、船の中央に魚雷が命中し、巨大な水柱を上げ一、二分にして沈没した。

この時、私は船首におり、前方を通過した魚雷だけに気をとられていたが、「万生丸」の後方を一発の魚雷が通過したというのである。我々が一発の魚雷を発見し僅か四、五分の間にこの大惨事が起こったのであった。瞬時に僚船二隻の轟沈を目撃した我々は、魚雷の恐ろしい威力に声も出せず呆然としていたが、「ああ俺は助かった」との安堵感と共に、まだ信じられぬ悪夢を感じた。

海面には漂流する資材の中へ波間に浮かぶ兵士達が一面に塵芥を散らしたように漂っている現実には只々非情を感じた。先刻まで船上に在った人々、平穩だった海面は修羅場と化し、その中を駆潜艇が狂ったように走り回りながら爆雷を投下、ズズンという鈍い音が海中から響いて来た。船団はいつの間にか四散していた。我が「万生丸」は、老朽な船体をきしませながら、只一隻で全速力をあげ九州へと引き返して行った。

我が船は再度出航、十月二十五日沖繩の那覇港に到着した。「万生丸」は見かけによらず、また名前の如く強運にも我々を沖繩の大地に上陸させた。この武運を天地の神々に感謝したのは、私一人のみではなかった。しかし、望見する那覇市街は十月十日の大空襲により焼け野原となり、港には小型艦艇や貨物船が無惨な横腹を見せていた。また大量な物資が、港のあちこちで黒煙を上げており、爆撃の被害の大きさをまざまざと見せつけられた。

私は最初の死線を脱し、那覇市を除けば、彼方の大

地まで緑濃い南国の豊かな光景を眺めることが出来たが、南国にも秋風が吹く季節となっていた。

独立迫撃砲第四中隊は首里末吉町に分散駐屯と決し、中隊の各隊は同地の民家に分宿となり、我が第六分隊十四人は比嘉亀吉氏宅に宿営と決まった。我が中隊は、沖繩守備の第三十二軍直轄隊となり、通称号は「球第一二三九七部隊」と変わった。この時は、よもやこの沖繩本島が激戦場になろうとは夢想だにしなかった。

十二月上旬、第三十二軍司令部参謀数人と迫撃砲各中隊幹部が参加し、中隊毎の陣地設定位置を現地偵察した。我が第四中隊砲陣地は、宜野湾我如古と決定された。我如古は、沖繩守備軍の予想する敵上陸地点たる嘉手納に対し、第一線防御陣地を形成する場所である。

これにより、各分隊毎に陣地構築が始まった。私は分隊の兵士を督励し連日懸命に土木工事を実施していた。陣地構築といっても実際は穴掘りである。直径三

メートル、深さ一メートル程度の穴の中に砲を据え付け、弾薬を格納し、兵が入ってその中で砲を撃つのである。穴の周囲は敵機に発見されぬよう擬装した。このような砲発射陣地を何カ所となく各地に造った。しかし、陣地構築は手作業による土木工具しかないため完成まで三カ月余を要した。

兵士達にとり一番の苦痛は空腹であった。私はそのため住民にお願いして芋を分けていただき隊員に食べさせた。時には、悪いと知りながら黙って住民の畑から芋や野菜を盗んだこともあった。

昭和二十年二月上旬、沖繩防衛のため召集兵が中隊に配属された。陸軍二等兵の軍服は着ていたがまだ十七歳の少年であり、砲分隊では体力的に無理であり、観測、通信分隊に編入された。他は一月に、住民のうち十七歳から四十五歳までの健康な男子総てに防衛召集があり、一カ月の基本訓練を施し各部隊へ配属した。聞けばその数三万人といわれていた。

第三十二軍の兵力は、満州から来た山部隊（第二十師団）・北支から石部隊（第六十二師団）が編入、

さらに独立混成第四十四旅団・軍砲兵団・海軍陸戦隊が主力であった。我々の耳には、硫黄島の激戦やB29による三月十日の東京大空襲の報が入り、敵の次なる目標は、いよいよ沖繩であろうことがヒシヒシと感ぜられ、全軍に緊張感がみなぎった。

三月二十三日、米艦隊が嘉手納沖に姿を現し、遙か沖合から首里方面に盛んに砲弾を撃ち込んで来た。その頃、硫黄島玉砕の報が陣中に伝わり、悲痛な思いと共に、いよいよ次は沖繩かと沈痛な思いであった。日本軍の威信にかけても沖繩は絶対に敵に渡さんぞと、必勝を期す我々守備兵は、生か死の間に直面して、その心境は複雑であった。

三月二十八日頃になると嘉手納沖は海面が見えない程の艦船で埋まった。闇夜の海上に閃光が走り轟々たる砲声が轟くと、我々の頭上をシュルシュルと大気を裂き唸り飛ぶ無数の巨弾が着弾し、凄まじい炸裂音が連続する。恐ろしいというより、現実とは思えぬ夢の中にいるようであった。昼は敵機が上空から爆弾投下や機銃掃射を繰り返す。制海権も制空権も奪われた地

上軍は手も足も出ない。

この戦法は、上陸する敵軍を我が陣地間近に引き付けて、必殺の反撃作戦を敢行しようとした軍司令部命令によるものであった。圧倒的な物量の相違の中で、いかに兵力を温存し決戦に持ち込むかという戦術的な配慮によるということであつた。特に兵員の補充、弾薬の補給も望めぬ状況ゆえ、敵上陸後混戦に持ち込み一挙に破砕する戦法を最優先としたためであつたといふ。

一月、守備軍は八センチ迫撃砲百五十門、砲弾一門当たり三百発を保有していたと知らされていた。三百発の砲弾とは急射連射すれば僅か三十五分か四十分の間に撃ち尽くしてしまう数量である。実に心細い戦闘態勢であつた。各中隊は軍上層部に砲弾の補給を強く要請し、ようやく三月上旬、七万発の砲弾が三隻の輸送船に積み込まれたと中隊長より知らされたが、その船も敵機の攻撃を受けて大損害を被つたとの悲報が伝えられ、我々は意気消沈したが、戦闘直前に一万五千発がどうやら内地より沖繩に到着し、各迫撃砲中隊に

配分された。手持ちと合わせ一門当たり四百発余となつたが、「無駄の無い射撃、無駄の無い攻撃」が軍からの至上命令であつた。

四月一日未明から開始された敵の上陸支援砲撃に使用された砲弾は艦砲弾約四万五千発、ロケット砲弾約三万三千発、重迫撃砲弾約三万発、航空機による投下爆弾約二万発であつたと米軍沖繩戦史に記録されている。

米軍が一日に使用した敵砲弾の量は、沖繩守備軍保有の全砲弾の約四〇パーセントに当たるといふ驚くべき数量であつた。沖繩の山野が蜂の巣になる程の砲爆撃と敵船舶の動向を見た我々は、いよいよ敵上陸の切迫するのを感じた。

四月一日払暁から米軍は予想の如く嘉手納海岸に上陸を開始した。我々陣地の北方約五、六キロの距離であるので、私は映画の戦争シーンを見ているような錯覚で呆然と眺めていた。ハッと我に返り部下に砲、弾薬、装具等の点検を命じた。皆黙々として点検し、誰

も声を発する者はいなかった。米戦史によると、日本軍の抵抗のないまま、四月一日に二個師団が上陸を完了したと書かれている。

敵は、我が南上原へ我如古く牧港の第一線防御陣地の正面一〇キロ以内に迫って来た。四月五日我が軍もようやく本格的な反撃の火蓋を切り、第四中隊の全砲も「各分隊急射五〇発」の命令があった。我が分隊は敵前進地に目標を定め砲撃、以後三カ月に亘る攻防戦の幕が切って落とされた。

四月六日になると、三十数輦のM4戦車群が我々の陣地前に出現し、砲撃をしながら右に左に行動してきた。しばらくして、中隊陣地の目前に、自動小銃を構えた歩兵を随伴した戦車が現れた。さっそく、我々は生死紙一重の状況である。戦車群に対し各中隊は一斉に砲門を開き、砲弾を戦車群や随伴歩兵に浴びせた。たちまち、五、六輦の戦車が擱座炎上している。しかし、昼間は敵の小型偵察機が低空を旋回しながら守備隊を探している。各砲陣地は偽装しているが、出来るかぎり敵機が我が上空を離れた時に砲撃することが安

全である。このトンボと呼んでいる飛行機は、時により身を乗り出し手榴弾などを投げて地上の反応を試すらしい。我々地上軍は終戦まで、このトンボに悩まされていた。

翌七日もM4戦車は続いて進攻してきた。再び我が迫撃砲と戦車の戦闘は一日中展開された。歩兵部隊は我々砲陣地より前方での戦闘であるので、戦車に対し十キロの黄色爆薬を兵が背負って壮烈な肉迫攻撃も幾度となく敢行している。迫撃砲第三中隊は戦車に発見され、戦車砲や車載の重機関銃、そして火焰放射器により攻撃され、第一小隊長田中少尉戦死という状況に陥った。我が第四中隊は第三中隊の左側二〇〇〜三〇〇メートルの場所に陣取っていたので、殺るか殺られるかと兵達の緊張も最高潮に達した。

翌八日正午頃、M4戦車三輦が我が中隊指揮班壕を発見攻撃して来た。各小・分隊の壕陣地は、指揮班を中心に配置されているので、機銃や火焰放射器による攻撃であった。壕を発見すれば火焰を浴びせ、息苦し

くて壕を飛び出すと他の戦車の機関銃が狙い撃ちする。戦車がこれ程接近しているということは歩兵守備線が既に破られているからである。

敵の三輦の戦車は、我が中隊観測所の壕の上から、獲物を狙う猛獣のように左右に行動していた。しかし、我々には戦車に対抗出来る武器はなく、発見されたら全滅である。その時、中隊本部へ集合の命令で本部へ向かった。この集合は、第四中隊も敵戦車に対する肉迫攻撃を敢行するための人選であった。第一番に呼ばれたのが第五分隊長石田伍長、次が私、三番目が戦列小隊第一分隊長木本兵長で、この三人が肉迫攻撃を命ぜられた。

爆薬は一〇キロの四角形黄色火薬であり、引き抜き信管を使用していた。我々三人には中隊将兵の生命が託される責任が重くのしかかっている。私はいよいよ死を覚悟しなければならなくなった。他の二人も同様であったろう。三人はこの火薬を背負い出発準備完了、中隊長は攻撃班長として石田稔伍長に指揮をとるよう命ぜられた。敵戦車は移動することなく、未だに

中隊の観測壕上で中隊本部壕の方向を向いていた。石田伍長は「機を見て出発するぞ」と小さい声で言った。本部壕から百メートルぐらい前進したところの岩影に飛び込み、三人で前進法・攻撃法等を話し合った。

敵戦車後方には随伴歩兵一個分隊ぐらいがいるので、後方からの攻撃は不可能。側面は芋畑の平地でこれも不可能、前方には所々岩があり畑との間には段差があるので、前方から攻撃しようと石田伍長から提案があった。私達も了承し班長の指示に従い、敵戦車前方からあらゆる地形・地物を利用し、匍匐して一歩一歩と接近した。約八〇メートルぐらいまで接近したとき、突然「ダダダッ」と戦車の機関銃音が響くと同時に「やられたっ」と呻き声が出た。左側にいた木本兵長であった。左肩二発の機銃弾が貫通しており、急いで兵長の傷を三角巾で止血をした。意識は確かだ。「大丈夫」と言い、痛さに耐えながら二人を見つめた。石田伍長は「これでは攻撃統行は無理」と判断しひとまず中隊本部へ撤退すると言い、二人で木本兵長を引

きずった。私は木本兵長の爆薬も背負い畑の低い所を見付けながら這いつくばって本部にたどり着いた。二人分の二〇キロの爆薬は想像以上に重かった。

石田伍長と私は、交替の清水兵長と共に再度攻撃に出発した。出発時、中隊長に「成功を祈る」と言われた。その言葉には、死んでも敵戦車を撃砲せよとの含みが有ったと、その時気付いた。我々は一回目と同じ経路を出来るだけ身を低くし、少しずつ敵戦車に接近していった。その時前方敵戦車の方向で爆発音と黒煙が上がった。歩兵部隊の肉迫攻撃でM4戦車三輦を擱座させていた。我々は再度帰隊し、歩兵部隊の攻撃を報告した。そして「俺は生き残れた」と思った時、懐かしい故郷の山野や父母兄弟のことが想い出された。その日は、しとしと降る梅雨の雨が続いた、昭和二十一年五月二十三日と記憶している。

擱座した戦車の周囲にいた残りの戦車も夕刻には引き揚げていった。この二日間で、第三中隊は多くの戦死傷者を出していたが、我が第四中隊には負傷者はあ

っても戦死者はいなかった。この時点で、一七六人の編成者は、一応健全であったが、その後僅かの期間に戦死傷者が三〇人も発生することとなった。

守備軍は戦況を予測し弾薬を各地に分散集積してあったため、我が中隊も陣地から約六キロメートル離れた南風原から夜道を、一箱三発の砲弾を背負って運搬した。迫撃砲中隊で最も体力を必要とするのは砲弾運搬であり、砲分隊以外の兵員がこの運搬に従事した。兵士が死を覚悟して運ぶ砲弾の数では補充が追いつかず「何とも致し方無し」と中隊長は悲しげな表情で語っていた。

彼我が接近した所では、友軍の二〇〇メートル前方は総て敵海兵隊、陸軍部隊、機動部隊であった。我が歩兵部隊から援護射撃の要請があっても、昼間はトンボが低空で我々を狙っているので、思うようには射撃が出来なかった。陣地を発見されたら最後、一日中艦砲の集中射撃を受けることになる。私は、本土や台湾から強力な援軍が逆上陸し米軍を挟撃撃破するだろうと、頑迷なくらい日本の勝利を確信していたのであつ

た。

首里の第二線陣地の左右両翼の守備部隊も突破され、首里死守の戦況も不利になっていた時、第三十二軍牛島満軍司令官は、残存する全部隊に対し、「五月二十六日から順次南部島尻地区へ撤退」の命令を発した。我々は首里を拠点として、最後の一兵まで戦うと思っていたので、意外な撤退命令に一時的ではあるが動揺したのである。

南部撤退し、容易に陣地構築が出来るかどうか、野戦病院の重傷者はどう処置するのかなど、多くの問題があった。我が中隊でも負傷兵を後送する手段も余力も残っておらず、砲、弾薬の搬送にも事欠く有様であった。

我が中隊に対しても「球第一二三九七部隊は、五月二十八日出発すべし」との命令が下達され、中隊は島尻郡津嘉山陣地へ移動となった。私は分隊長八人を指揮して重い砲を分解し弾薬を背負い、暗い梅雨の中を黙々と進んだ。中隊の負傷兵には田口衛生伍長指揮のもと、衛生兵二人、奉仕女学生五、六人が付いていた。

と記憶する。我々の分隊より負傷兵を抱えた衛生班、田口伍長の労苦は我々以上のものがあつたと思われた。

津嘉山は首里から南方約六キロ、何としても夜明けまでに守備陣地へ着かねばならぬ。道も無く泥濘と化した中を一步一步懸命に急いだ。所々に深さ七、八メートル直径五、六メートルもある敵艦砲弾炸裂の穴が行く手を阻む。その間、「死の橋」という敵の砲撃目標の橋を避け、急流を砲を担ぎ、弾薬を背に、全員助け合いながら渡渉することが出来た。しかし、夜が明ければ、撤収した部隊と居残った住民で日に日に混雑して来た上に、敵の砲爆撃も激化し多くの犠牲者を出した。

津嘉山戦線へ後退して来た部隊は、指揮者なき寄せ集めの集団、さらには住民の群れが砲爆撃に曝され倒れ、呻き、泣き、叫び、屍が果々の修羅場と化した様は、真に「地獄の戦場」であった。六月十日頃には守備陣地に着いたが、迫撃砲隊は歩兵の「石部隊」第六十二師団への援護射撃のため、各分隊は歩兵部隊に

それぞれ配属され、我々は第四中隊の指揮から外されることとなった。

六月になると戦況はますます厳しいものになった。

軍はもろんのこと住民も老若男女を問わず米軍に追い詰められていった。我々は六月中旬、撤退のため陣地の壕を出ると、そこは無惨な地獄絵にも似た情景であった。暗い泥の中を両腕だけで這いずる者、片足と肘を使って這いずる者等、僅かに残った気力を振り絞って後退しようと、生をかきたてた重傷者が多数うごめいていた。

雨と泥にまみれながら、食糧を得る術もなく、ただ命ある限り撤退を続ける哀れな姿であり、偽りない悲劇であった。共に、沖繩防衛の御盾として闘い傷ついた戦友を介護することも出来ず、置き去りにすることは忍びないがどうにもならなかった。自分自身の生きる道を探さねばならない。重傷者に心の中でお詫びしながらその場を去った私も、分隊員も皆追われるように南へ進むのであった。私の堅持していた必勝の信念

は最早消滅し、いよいよ沖繩で玉砕だと覚悟を決めなければならぬと思った。我が軍は沖繩の南端一〇平方キロ足らずの地域に追い込まれてしまったのである。

この時期に軍・県は一般の市民に対し、米軍は「武器の無い住民を決して殺すようなことはない」と説得し、米軍が既に占領している知念地区へ避難するよう勧めた。これによって多くの住民が知念半島に向かって出発したが、途中米軍の戦車に遭遇し、再び逆戻りをする悲惨な状況もあった。我々分隊は、先程申したように津嘉山戦で「石部隊」の歩兵中隊に派遣されていたため、本隊である迫撃砲第四中隊がどこにいるか判らぬまま、これらの撤退の流れの中に巻き込まれながら、南へ南へと後退していった。

沖繩最西端の喜屋武岬に追い詰められた我々残兵は、虚脱した烏合の衆と化して、梅雨が明けた真夏の太陽の下で敵中に残されていたのである。少数の敗残兵の掃討の他は、戦場音も無くなり静かになっていた。今は、上官も部下も無く「捕虜となるか、死を選ぶか」と絶望の將兵集団で、後に聞いた話では四、五

千人であつたらうとのことである。

米軍は敗残兵を三〇〇〜五〇〇メートルの距離で包囲し、所々にM4戦車を配置、戦車がマイクで降伏の勧告を始め、我々もその声を聞いていた。「オキナワノ タタカイハ オワッタ デテコイ テラアゲテ デテコイ コロサナイ パン タバコアル」。また「私は〇〇部隊の〇〇という者であります。米軍は人道的であり、武器を捨てて降伏すれば決して殺さない。戦友諸君、沖繩の戦いは終わりました。無駄死にはしないでください。今すぐ安心して投降してください」などと、概ねこのような呼びかけであった。

この降伏勧告により、住民の多くは投降して行き、二、三日後には子供連れの親子や、荷物を持った住民の姿は少なくなった。守備軍の残兵の中にも投降する者が出て来た。私の分隊は砲一門、弾薬二十四発、小銃二丁、弾丸九発、手榴弾十六個を所持していた。砲、弾薬については、状況から見ても使用不可能であるので、穴を掘って危険が無いように埋めた。

陸も海も蟻一匹這い出る隙も無い米軍の警戒である。そのため大勢での脱出は不可能であった。私は分隊員に分散することを伝え、命があつて国頭地方で再会出来ることを祈り別れを告げた。分隊員は、気の合う戦友と国頭へ脱出を図った。

私は、近藤一等兵、防衛隊員首里末吉町の比嘉亀吉氏と三人で組を作った。私は「降伏か、斬り込みか、北部脱出か」どれを選ぶかを考えた。「生きて虜囚の辱めを受けず」が染み込んでおり、降伏勧告には絶対応ずる考えはなかった。また、斬り込みをするにしても武器は手榴弾二発であった。夜を待っても敵は真昼のように照明弾を打ち上げており、首尾よく接近出来ても手榴弾を投げられる確率は少ない。発見され射殺される確率のほうが高い。それでは自殺行為にすぎない。北部脱出を選ぶ以外に道は無い。最後まで生き望みを棄てないで三人は北部国頭を目指して進むことに決まった。

まず眼前で包囲している敵陣を突破することが最大の難関である。敵中を潜行脱出は一〇〇パーセント死

を意味するが奇跡もある。もし脱出に成功し、国頭の友軍と合流しゲリラ戦に参加出来たとしたら、軍人としての任務を完うできる。我々は、日中は岩影に潜み夜となれば動き出す。こうして、やっと摩文仁の海岸から名城、糸満、小禄地区まで進むことが出来た。幸いに防衛隊員比嘉氏がいたので地理に詳しく脱出に大いに役立つてくれた。

小禄には米軍の資材置場や幕舎が建ち並んでいたが、ここへ来るまで幾晩を要したか判らなかつた。その間、米軍歩哨が自動小銃を手に威嚇射撃をする姿も見、発見されたかと身を潜めていたこともあつた。海辺にも岩礁にも友軍の死体がゴロゴロとしていた。この情景は生涯忘れ得ぬ地獄絵だつた。

小禄には潜伏出来るような場所が無いのでアダン・ツワブキの密生地、群生林の中にある洞窟を見付けた。我々は最大の危機を突破出来た喜びと安心感が湧き、翌朝まで安眠することができた。アダンは奄美大島、琉球列島、台湾等の海岸に自生する常緑樹であるという。空腹を感じ目覚めた時は既に夕暮れになつて

いた。米軍は夜は撃たぬから、食糧探しに畑の中に入り、明日食べるだけの薩摩芋を掘り生で食べた。

三人で相談したが、これからの脱出はまだまだ困難であるというので、翌朝私一人で付近を偵察した。山という山の緑は無くなり、道も畑も區別出来ぬほど砲弾で掘り起こされ、大きな穴だらけである。敵は数台のブルドーザーで主要道路を建設しており、その付近は米軍の残敵掃討が無いため安全であると考え、当分の間はここを休養の場とし、機を見て北部に脱出することにした。

十日程後、我々は真夜中に北部脱出の行動を開始した。敵の幕舎と幕舎の間を通り抜けなければ北へ進むことが出来ない。途中トラックに発見されそうになりながら進んだが、ますます幕舎が増えてくる。進んでも隠れ場所があるか無いか判らぬので、元の洞窟に引き返した。我々は翌日夜になると再び脱出をした。前夜よりも西側、海岸から山の手の方向に進んだ。夜間行動している者はほとんど残兵である。途中畑の中にある敵陣地の跡で缶詰を採って食べた。貴重な食糧で

あるので持てるだけ背負って北へ向かって進んだ。このように行動していたが、喜屋武岬を出発して約一月を経過したのに今だ小祿の地から脱出出来なかった。

ある日、火のような光に見えた方向に進んで行くと雑木林の中で一つの人影を発見した。米兵は夜行動しない。私は近くまで行き合言葉「山」と言うと「川」と答えてきた。「石部隊」の残兵であった。我々を洞窟に案内してくれた。後日判ったがそこは元陸軍野戦病院の壕であった。高さ一五メートル余りの大きな壕である。壕内には死臭と熱気が充滿していた。平たい所に歩行不能なため放置された負傷兵二十人余り、食糧も水も無く死を待つて横たわっていた。毎日数人が死んでいったとのことであった。壕の奥の片隅に死体が積み重ねたように置かれ、既に白骨化した死体もあり鬼気迫る世界であった。彼等は一月以上もこの壕で生活しているとのことであった。一度敵の巡察隊が来て手榴弾二発が投げ込まれたが、穴が曲がっていたた

め途中で炸裂し壕内での負傷者は無かったという。このような野戦病院は至る所にあり、放置された負傷兵は痛ましい犠牲者であった。誰にも看取られることも無く死んでいった負傷兵はたくさんいた。

我々は次の国頭脱出の進路を定めるべく付近を偵察した。以後数日間、このような日々を繰り返して単に小祿周辺を徘徊していたに過ぎなかったのだが、そこから三〇〇〜四〇〇メートルぐらい先に立派な道路があり、米軍のトラックが忙し気に数台走り去るのが望見された。

眼下の那覇港沖には大小幾百隻の船舶が悠々停泊している。全船舶が煌々と輝き、とても戦場とは思えない眺めである。米軍駐屯地には半円型や蒲鉾型兵舎が二十棟余り並んで建ち、夜は野外で映画など催し、戦勝祝のように見えた。

ある日突然地軸を揺るがすような砲銃声が轟き、我々の洞窟の中まで響いてきた。我々は、いよいよ日本軍が台湾から援軍として到着したものと考えた。しかし、友軍らしき姿は空にも海にも見当たらない。そ

の夜、海上の船舶も、陸上の兵舎も今までより煌々と輝きを放ち、音楽も高く鳴り響いていた。後日判ったが、これは日本国の無条件降伏、米国勝利の祝砲であったのだという。

その後のある夜、我々が湧水場で水浴をしていると人の声があった。慌てて身を隠したところ、前方から二人の日本兵がやってきた。私が「山」と言うと「川」と答えて来た。二人は付近に潜む残兵に降伏するよう呼びかけているとのことであった。我々の潜んだ洞窟は小塚と首里後方との中間の位置だったと思われる。その日本兵は、我々に日本の新聞も見せてくれて「私達は貴方達を犬死にさせたくない。実は私達は米軍の捕虜です。今は米軍の許可を得て貴方がたを捜して歩いているのです」と真剣な顔で説得を続けた。

我々は、以前宣撫員が、マイクで日本の無条件降伏の話をして聞いたのを聞いていたが、この時も降伏の決心はつかなかった。二人は「二、三日したらまた来ます」と言い別れていった。我々三人は、いろいろな話し

合ったがなかなか結論が出ないまま宣撫員の来る日となった。

日本は降伏していた。我々は終戦も知らず、二カ月以上も頑張っていたのだった。投降と決断したのは昭和二十年十一月六日である。月日は米軍捕虜收容所で知った。我々の脱出行は厳しい月日の間、一人の脱落者もなく終わった。比嘉亀吉氏は住民集団收容所に、私達二人は石川捕虜收容所に送られた。

この日、昭和二十年十一月六日こそ、生涯忘れることのない私の終戦記念日となった。一緒に收容された五人の内、下士官は私一人であったが、捕虜は階級の別なく、背中にPWと白ペンキで書かれた米軍の古い戦闘服を着せられ、将校、下士官、兵、沖縄兵と別々の幕舎に入れられ、昭和二十一年十二月二十二日、復員のため那覇港から乗船、二十四日早朝、名古屋港に上陸することが出来た。

迫撃砲第四中隊は総員百七十六人であったが、約三カ月に亘る沖縄戦に参加し、生存者僅か十二人という壊滅的打撃を受け戦争を終えた。堀越中隊長以下戦死

者百六十四人、戦死場所の確認できた者約三十人、他の百三十数人の戦友は津嘉山、摩文仁の乱戦・混戦の中で人知れず散華されたのであった。

嗚呼南西の島、沖繩に散華せる戦友の霊に合掌。

## 北朝鮮脱出

### 五度の奇跡

神奈川県 三好 久吉

昭和十六年七月六日「第七師団野砲兵第七連隊ニ入隊ス可シ」という臨時召集令状が来た。この時私は二十六歳、長男が生まれて四十日目、突然配達された赤紙が私の運命を変えてしまった。

八月二十日、関東軍西東安の砲兵団に配属され、十月八日、日米開戦、戦線は北に南に拡大し、昭和十八年の暮れまでに三回も本隊が出動した。連統の動員に下士官の欠員が生じた我が部隊は、三カ月毎に下士官の抜擢試験を実施したが、召集解除を待っていた私

は試験答案を書かないためいつも不合格。不真面目な私の態度に激怒した准士官に毎回数十発のビンタを喰う。重なる制裁にも屈服しなかった私は、こうして部隊名物の不良兵になり、当然のことながら、本隊出動毎に残留兵となり、次の部隊編成の小間使いを務めていた。

その二年の間に勇躍して出陣した部隊は、海に島嶼に全滅、沈没等の悲報続く。このような時、悪運か強運か生き延びて不良兵の汚名に甘んじていた私にも遂に出動の番が来た。その時、昭和十九年二月「北支派遣呂第一四八四独立砲兵大隊要員五人選抜セヨ」の命である。最古参の不良兵が擱み出されたのは極めて当然である。軍用列車の到着した所は戦場の一隅、黄河東岸の太原であった。日没から始まった散発的な銃声に身震いし、ここは戦地なのだ、たとえようのない恐ろしさを知った。

集結した七〇〇人は全くの不良兵集団、中隊長は陸士出身の大尉だったが、将校は一年志願の予備少尉、下士官は満州各地の現地召集、兵隊は第二乙種で四十